九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

反右派闘争前後の『詩刊』一考察

武, 継平
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9656

出版情報：中国文学論集. 26, pp.90-107, 1997-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

中国文学論集　第二十六号

反右派闘争前後の『詩刊』一考察

武　継　平

はじめに

我々がこれまで文献で知った歴史には真実もあれば偽りもある。歴史的真実を突き止めるには数多くの障害を乗り越えなければならない。今から四十年前に創刊された中国トップレベルの詩誌『詩刊』の研究についても同様である。『詩刊』は一九五七年一月創刊され、一九六四年十一月に休刊[1]、一九七六年一月又復刊し、創刊以来、波瀾万丈の二十七年間を歩んできた。創刊期の『詩刊』について調べていくと、必ず反右派闘争の問題にぶつかる。反右派闘争は現代中国の共産党支配や毛沢東と切ってもきれない関係がある。その拡大化は共産党指導の過失として見直されてはいるが、反右派闘争そのものに対する公正的な是非判定はいまだにされていないままである。小論は五七年反右派闘争前後の『詩刊』の在り方を究明することを目的とする、特に『詩刊』の成立事情及び五七年の反右派闘争前後の『詩刊』と共産党指導部門との関係、また反右派闘争が『詩刊』に何をもたらしたかを考察の重点としたい。基本資料は六四年までの『詩刊』、五七年の『人民日報』、『文芸報』、『文芸月報』、五七、五八年の『文学研究』などである。

一、『詩刊』の成立

『詩刊』は一九五七年一月二十五日に北京で正式に創刊された新中国成立後初めての、中華全国作家協会所属の詩歌専門月刊誌である。その創刊号によれば、編集部の構成は編集委員八名（臧克家［編集長］、徐遅［副編集長］、厳辰［副編集長］、田間、艾青、呂剣、沙鷗、袁水拍）と編集者（名前不記）三名合わせて十一名である。こうした当時の詩壇で活躍している一流詩人の勢ぞろいは反右派闘争の後期にあたる十一月に編集部内部から摘発された右派分子が行政処分を受ける時点までは変化はなかった。創刊当時の事情については殆ど資料がないが、創刊号にある編集者後書きによれば、創刊前にかなり長い準備期間があり、準備期間中設置委員らは関係詩人たちを訪ねたり、座談会を開いたりして多くの人々から意見を聞いたという。[2] 全国作家協会の機関詩誌だから、最初は設置委員の誰かが創刊の提案をしたのだろうか、それとも誰の提案でもなく、某指導者の指示だろうか。先ずそれを究明すれば、『詩刊』の在り方に一歩進んでアプローチすることができると思う。

「『詩刊』を私に任されようとしたとき、私は少し気がねしていたので党の責任者劉白羽同志（全国作家協会副主席、党副書記）に何回も相談しに行った。彼は、心配するな。『詩刊』には共産党員がいないというなら、君と徐遅が党員だ！と言ってくれた。[3]」

これは五七年五月中旬に開かれた『文芸報』主催の文芸界座談会における臧克家の発言である。『個人的感受』という題名で同年『文芸報』第八号に掲載されている。『詩刊』創刊前のことに触れたこの発言によって、『詩刊』の創刊が明らかに最初から全国作家協会の党指導者たちの指示によるものだったことが分かる。とすれば、編集長の臧克家らにとっては、『詩刊』を作ることは党から与えられた政治的任務だ。任務だから上からの指示に従って、それを遂行すればよいのだ。雑誌にとっての最も重要な編集方針、敏感な政治問題の対応策などは作家協会の党組織の意見を聞けば、あとで間違えたとしても責任を問われることはない。一方、非党員作家に対する政治的な差別待遇[4]に不平不満を抱く文化人が大勢いるという権力側に不利な情勢の中で、文芸界の指導者たち、具体的に言えば、

周揚（共産党中央宣伝部副部長）、郭沫若（中華全国文学芸術界連合会主席）、茅盾（文化部長、全国作家協会主席）、邵憧麟（同協会副主席、党書記）、劉白羽（同協会副主席、党副書記）らが、唯一の国家レベルの専門誌『詩刊』編集長の椅子を延安時代からの共産党員で国際的知名度の高い艾青や厳辰、田間らに座らせないで、非党員で、民主党派所属の臧克家に長年任せられたのは何故だろうか。その背後に何らかの堅い信頼関係があったに違いない。このような信頼関係については小論の後半で改めて追究するので、ここでは省く。

二、反右派闘争前後『詩刊』の在り方

五七年反右派闘争前後『詩刊』がどの様な存在だったか、そしてその間『詩刊』の編集方針や編集部の構成にどんな変化があったのか、さらに、小稿で最も究明したいこと、つまり五七年六月六日から九月十七日までの間文学界で行われていた凄まじい政治闘争の中で『詩刊』が指名批判から免れ、そして生き残った原因はいったい何なのかなどについて詳しく検討してみることにする。

（一）一九五七年『詩刊』一考察

まず、『詩刊』の作品掲載の状況から反右派闘争前後の編集方針の変化を見たい。

創刊号の詩歌欄には臧克家宛の毛沢東の手紙と古典定型詩十八首や袁水拍、戈宝権訳のチリ国民詩人ネルーダ（1904－1973）の詩二首を除いて、十一人の作品が掲載されている。艾青、馮至、蕭三、徐遅、といった知名度の高い既成詩人に、新人の厳陣、孫静軒二人を加え、言わば百花の芸術家型詩人である。詩論欄に文芸理論誌『文芸報』の編集長張光年が書いた評論『論郭沫若早期的詩』が載っている。以上の作品の内容は祖国の風土賛美、戦争時代の回顧、社会主義祖国辺境建設賛美、大自然詠嘆など幅広い。形式も叙事詩、抒情詩、自然風物詩など多様多彩である。

二月号の作品に内容の変化を見せたのが二編の詩である。一つは臧克家の『在毛主席那里作客』で、今一つは軍人詩人公劉の『遅開的薔薇』[5]である。前者は毛沢東に引見された作者の感動を記録したもので、後者は所謂「時代の姿が見なく」「時代の足音も全く聞こえてこない」という純情恋愛詩である。この作品は個人的な愛の受け止め方、個としての詩人の内面を告白している。こういう個人の私的心情を述べた詩が初めて『詩刊』に姿を見せたので、極めて目立つ。詩論欄においては艾青の『望舒的詩』、新月派の先輩詩人陳夢家の『談談徐志摩的詩』、呉騰の『五四以来的詩刊掠影』など本格的な詩論が掲載されている。

三月号の詩論欄では、臧克家が『一九五六年詩選』のために書いた序文『在一九五六年詩歌戦線上』が注目される。この序文は、趣旨が前年度の詩歌の位置付けにあるかと思うが、三つの重要問題を提起している。（一）、「詩は社会主義の多彩さを反映せねばならない」。作品に「不健康な〈愛情〉[6]が〈百花斉放〉に便乗して台頭している」が、「毛主席と目下の幸せな生活と未来の輝かしい遠景との三者に対する賛美を結び付ける作品こそ思想性が強い。」（二）、「異なる意見のある詩、様々な類型の詩に関しては、出席人数の少ない座談会でその善し悪しの検討はできるが、その作品を人民大衆のなかで試練を受けさせることはもっと重要である。」（三）、「詩人たちはいまだに時代精神を摑んで居ない。」

四月号には、作品内容として社会主義建設を反映する作品が多くなる。詩論に沙鷗の書いた『艾青近年来的几首詩』がある。艾青のことを天才詩人として讃えたこの詩評は僅か一ヶ月半後に始まった反右派闘争の中で作者沙鷗を窮地に立たせた。

五月号の詩に最も注目されるのは袁水拍と杜運燮の作品で、前者は『諷刺詩三首』の中で対象を特定しない某編集部の教条主義を批判し、後者は「春風は…深い眠りにおちた人たちを覚まし」「必要のないためらいをはらいのけた」（『解凍』）と歌った。二作品とも五月十七日中国作家協会党組の、文学界整風開始宣言[7]以来の文壇現状と知識人の心情を端的に反映している。詩論に公木の『簡論中国古典詩歌伝統問題』が注目を引く。「記念〈在延安文芸座談会上的講話〉十五周年[8]」という副題が付いており、誰のために書くか、何を書くか、どう書くかなどといった言わば社会主義の文芸方針に関わる最も重大なことを論じている。作者は五四以来の新詩が、形式上外国から導

入したもので中国古典詩の伝統を受け継いだものではないという、主に宋謀、朱光潜を代表とする学説と論難しただけでなく、一九四二年毛沢東の『在延安文芸座談会上的講話』発表以来の十五年間教条主義的文芸理論の指導を受けたため、文芸作品は公式化、概念化に陥ったという「大鳴大放」中現れてきた論点にも反発した。そして、〈百花斉放〉の中で〈香花〉だけを咲かせ、〈毒草〉を生えさせないなら『在延安文芸座談会上的講話』に従うほかない。さらに文芸の最も重要な問題、即ち文芸の内容と奉仕する対象に関しては人民大衆の生活と闘争を反映せねばならないという〈労農兵方向〉を強調した。

六月号には初期反右派闘争（文芸界では右派分子が摘発されていない時期）の状況は全く反映されていない。詩論は一編もなく、詩作品にも特に注目すべきものがないように思われる。ただ編集者後書きの中で、創刊半年来の総括として「成長と発展を祈る」という毛主席の御言葉を頂いている上に全国の詩人の支持を得ていると自信を固める一方、「強烈な時代感情や濃厚な生活の息吹が鮮明に表現されていない」と自己批判もしたのである。六月十九日、階級闘争論と〈香花〉か〈毒草〉かを区別する六つの標準が新たに書き加えられた毛沢東の『関於正確処理人民内部矛盾的問題』が『人民日報』に正式発表された。特に〈香花〉か〈毒草〉かを区別する毛沢東の定めた六つの標準[9]は六月下旬から文芸界で〈大毒草〉の批判やブルジョア右派分子の摘発の問題が日一日表面化する触媒となったのである。

七月号は〈反右派闘争特輯〉である。七月号詩作品は七十九首もあるが、特集の内容は十九首の短い〈政治諷刺詩〉である。その焦点が毛沢東の発案で一番最初に摘発され反党集団と断罪された民主連盟中央指導者章伯鈞、羅隆基らの批判に向けられていることが判る。だが作品そのものはなんとなくいい加減に間に合わせたもので、巻頭にある臧克家の動員文の期待に十分答えることができないばかりか、要点すらついていない感じである。また特集の執筆者八人のうち、袁水拍、田間、沙鷗、徐遅に巻頭語を書いた臧克家を含めて五人もが『詩刊』編集委員である。それは、編集者後書きで断られた「これらの作品は編集部に最近大量に押し寄せてきた反右派闘争の詩歌作品原稿から選ばれたものである。」という記述や「『詩刊』はこの偉大な政治闘争のために紙面を提供したい」という決意などと矛盾しているように思われるが、『詩刊』編集委員過半数の、反右派闘争に自ら参加する積極的な姿

勢をよく反映している。編集者後書きの最後にある「われわれも、詩歌界の右派分子の作品や反動的な言論、例えば流沙河の『草木篇』とそれに関する気違いのような攻撃的弁解に反撃と批判を加えなければならない。（中略）詩人たちよ、より沢山の戦闘的な詩編を送って下さい！」という原稿募集のよびかけは、六月二十一日『人民日報』に編集者の言葉を付して転載されて以来、批判文が続出した『草木篇』に対する『詩刊』の全国レベルの専門誌としての正式な反応と見て間違いなかろう。

五七年七月になると、毛沢東執筆の『文匯報的資産階級方向応該批判』が『人民日報』社説として発表された。それは初めて「資産階級右派とは即ち…反共反人民反社会主義の資産階級反動派のことである」と右派の定義を下し、その上、〈百花斉放、百家争鳴〉中の護符〈言者無罪〉[10]は右派に適用しないと宣告した。それをきっかけに、反右派闘争は実質的に第二段階に入る。つまり右派分子を摘発、批判そして追放する生きるか死ぬかの階級闘争に変わったのである。文芸界における右派分子の摘発は二種類の文化人を対象に行われた。二種類の文化人とは、（一）反共産党反社会主義の容疑のある人たち；（二）作品が〈毒草〉と判断された人たち、のことである。前者では蕭乾、劉賓雁、戈揚、呉祖光，八月にまた王若望、白航、そして文芸界最大の反党右派集団丁玲、陳企霞、馮雪峰、艾青[11]など；後者では流沙河、石天河、陳夢家、従維熙、劉少棠、張賢亮、周沛良、穆旦など次々に摘発された。当時の国務院副総理兼国家経済委員会主任であった薄一波が「反右派闘争の中で摘発された〝右派分子〟の総人数は五十五万人にのぼった」と一九九三年になって初めて数字だけを公表したのだが[12]、いまだにその人名リストは誰も見たことがないし、文学芸術界の人が何パーセントを占めているかも知りようもないのである。

『詩刊』八月号には反右派詩歌作品が十八首も掲載されている。だが、丁玲らのことを書いたのだろうと大体は見当が付く袁水拍の『一場悪戦』を除いて、政治諷刺詩として完成度が低い。詩論に『〈草木篇〉批判』（沙鷗）、『李鳳白的公開信』（鄒荻帆）、『莎士比亞的照妖鏡』（屠岸）の三編があるが、沙鷗の『〈草木篇〉批判』は先月号の関係作品募集以来の第一編であり、作者が『詩刊』編集委員だからある意味では文芸界の〈大毒草〉と断罪された『草木篇』に対する『詩刊』編集部の態度表明だと見ても間違いなかろう。『詩刊』と「毒草」の関わりなどについては別論文で詳しく考察するつもりなのでここでは論じないことにする。

『詩刊』九月号に掲載された反右派政治諷刺詩は依然として迫力に欠けるものだが、『詩刊』副編集長徐遅の書いた批判文『艾青能不能為社会主義歌唱？』や同じ編集委員の田間の批判会議での発言紀要『艾青、回過頭来吧！』、および詩論欄にある署名黎之の重みのある論文『反対詩歌創作的不良傾向及反党逆流』は作家協会内部もしくは『詩刊』編集部内部の変化を反映している。艾青批判に関してはそれまでのものの殆どは、艾青という人の人格と品行に対する攻撃だ[13]と見てよい。徐遅の批判論文『艾青能不能為社会主義歌唱？』は『詩刊』九月号の出版より一日早く『人民日報』にも発表されたが、初めて艾青の作品に矛先を向けた論文である。

文学界の反右派闘争（摘発→断罪→批判→追放）は中国作家協会党組拡大会議の形で六月六日から九月十七日まで凡そ三ヶ月半続いた。その間、「丁陳反党集団」の摘発で八月上旬ピークを迎えた。そして九月十七日、共産党中央宣伝部長陸定一、副部長周揚や郭沫若、茅盾などの文芸界最高指導者たちは第二十七回作家協会党組拡大会議にあたる文芸界反右派闘争総括大会に出席し、講演を行い、作家協会党組書記邵荃麟は報告を行った。また同日の『人民日報』によって、ソビエット十月革命を盛大に祝う準備活動の開始に関する党中央の指示が全国に伝達された。

こうして十月に入ってからソ連に学ぶという政治的転換期を迎え、反右派闘争は嘘のように急にストップした。政治のパロメーターである『人民日報』の紙面にはその後一ヶ月反右派闘争の関連記事が姿を消し、ソ連関係の社説や記事、報道などで占められた。『文芸報』も第二十九号からソビエット十月革命以来四十年間の文学の紹介に目を向け、さらに三十、三十一、三十二、三十三号と連続四期の「偉大な十月社会主義革命四十周年記念特集」を組んだ。特に中華全国文学芸術界連合会主席郭沫若が『文芸報』記者のインタビューに答えた談話が「ソ連文芸に見習え」という題で三十号『文芸報』に発表された後、反右派闘争が一段落を告げたあとの文芸界の新しい発展方向が見えてきたのである。こうした大きな政治的な動きの中で、『詩刊』十月号もそれに歩調を合わせて十月革命四十周年祝う特集を編集した。だが、十月の『人民日報』に反右派批判論文を既に殆ど見なくなっているにもかかわらず、『詩刊』十月号は沙鷗の『艾青近作批判』を重要論文として載せたのである。私にはこの論文の発表は、かつて知識人の個性を尊重していた『詩刊』編集部が反右派闘争の中で編集委員から艾青、呂剣の二人；編集担当

者から唐祈一人を摘発して追放し、また内部の自己批判を重ねた上、やっと思想の統一ができるようになったということをある側面から暗示しているように思われる。つまり沙鷗の自己批判をも兼ねたこの論文の趣旨は単なる艾青批判にあるのではなく、『詩刊』編集部自身の過去に対する否定にもある。反右派闘争が始まるまでわずか数ヵ月の「過去」しかもっていない『詩刊』だが、前述の創刊号から六月号までの『詩刊』考察の結果を見れば分かるように、その短い過去は「百花斉放、百家争鳴」の実践の日々であった。こう言う意味で、『詩刊』の過去の自己否定は事実上「百花斉放、百家争鳴」の文芸方針を否定したことになると言わざるをえない。今まで「文芸雙百方針」は毛沢東の『在延安文芸座談会上的講話』に基づく社会主義リアリズムの全面勝利だと受け止められていたが、『詩刊』周辺の事情を考察していくと、この方針は、ある意味で、社会主義リアリズムに賛成しない、個性の羽を伸ばしたくて、創作の自由を求めようとしていた知識人たちを一網打尽にしようとするために設置された大きな落とし穴だったのではないかと思えてくる。[14]

十一月二十五日までに『詩刊』編集部の組織がえが終った。再編成された編集委員会の構成は次の通りである。臧克家(編集長)、徐遅(副編集長)、卞之琳、田間、厳辰、阮章競、沙鷗、郭小川。以上の編集委員構成で明らかになったのは、元副編集長厳辰が編集委員に降職され、艾青、呂剣二人は右派分子として解職処分をうけたことである。臧克家に最も信頼されていた袁水拍の名前も再編成後の編集委員リストから消えてしまった。新しく加わった三人の内卞之琳は名作『断章』(1935)を書いた著名詩人で、当時北京大学文学研究所研究員だった。阮章競も詩人だが、解放後共産党中央華北局宣伝部文芸処処長を勤めていた党の幹部[15]だった。郭小川は党歴の古い古参幹部で、当時作家協会党組副書記[16]だった。

『詩刊』十一、十二月号は大きな変化はない。後者は編集者後書きの形で創刊後、特に六月以来の反右派闘争をふりかえり、そして来る五八年を新しい気持ちで迎えようとする編集計画を発表している。その計画で最も注目すべきことは二つある。一つは五八年一月から毎期詩人論(五四以来の詩人、古典詩人、外国詩人論など)を載せること;今一つは『中国新詩史』を載せることである。だが、五八年『詩刊』を調べたところ、前者は一部しか実現されなかった。聞一多、殷夫、王統照三人に関する詩人論は最初毎期一編ずつ掲載していたが、それは三ヶ月しか

続かなかった。後者は、五八年内には実現されなかったが、翌年六月号から十二月号まで四回にわたって掲載された「新詩発展概観」の形で実現された。

（二）反右派闘争前後の『詩刊』と党の指導部門との関係

次に五七～五八年『詩刊』に発表された党中央、政府部門及び文芸界最高指導者たちの作品一覧表を作ってみた。それを見てみよう。

57年期号	作者氏名	作品名	作者身分（一九五七年当時）
（1）	毛沢東	旧体詩詞十八首	共産党中央委員会主席
（1）	毛沢東	関於詩的封信	同上
（7）	茅　盾	従「眼高手低」説起	文化部長、作家協会主席
（8）	董必武	聞長江大橋成喜賦	国家副主席
（9）	林伯渠	詩二首	中共中央政治局委員
（9）	陳　毅	贈郭沫若同志	国務院副総理、政治局委員
（9）	郭沫若	一九五五年五月贈陳毅同志	中華全国文学芸術界連合会主席
（11）	郭沫若	月里嫦娥想回中国	同上

58年期号	作者氏名	作品名	作者身分
（1）	毛沢東	蝶恋花・游仙（贈李淑一）	共産党中央委員会主席
（1）	劉白羽	対詩的希望	作家協会副主席、共産党副書記
（2）	郭沫若	牡丹・芍薬・春蘭	中華全国文学芸術界連合会主席
（2）	陳　毅	送歳・元旦試筆・贈印度友人	国務院副総理、政治局委員
（2）	田　漢	歌十月革命四十周年	中華全国文学芸術界連合会副主席

(4)	邵荃麟	門外談詩	中国作家協会共産党書記
(4)	郭沫若	頭上照耀着紅星	同前
(4)	茅　盾	工人詩歌百首読後感	文化部長、作家協会主席
(5)	陳　毅	剣三今何在？	同前
(6)	郭沫若	遍地皆詩写不贏	同前
(7)	郭沫若	「大躍進之歌」序	同前
(9)	郭沫若	長春行	同前
(10)	毛沢東	送瘟神二首	同前
(10)	陳　毅	四遊良口	同前
(11)	茅　盾	悼鄭振鐸副部長	同前
(11)	郭沫若	猪与石	同前

統計：毛沢東（57,1；58,1；58,10）発表計三回、のべ詩二十一篇外手紙一通。　董必武（57,8）発表計一回、詩一篇。　陳　毅（57,9；58,2；58,4；58,10）発表計四回、のべ詩十篇。　林伯渠（57,9）発表一回、詩二篇。　郭沫若（57,9；57,11；58,2；58,4；58,6；58,7；58,9；58,11）。　発表計八回、のべ詩五十二篇外序文一篇。　茅　盾（57,7；58,4；58,11）発表計三回、のべ文三篇。　邵荃麟（58,4）発表一回、文一篇。　劉白羽（58,1）発表一回、文一篇。　田　漢（58,1；58,2）発表二回、長編詩一編。

五七年の文芸「百花斉放、百家争鳴」という一時的なリベラルな雰囲気の中で数多くの文芸誌が創刊され、或いは改版改名して新しく登場した。[17] ただ、それらの雑誌のどれ一つとしてこれほど多くの「中央首長」の作品を掲載したものはあるまい。この一覧表はこれら数多くの文芸誌の中で『詩刊』が文芸政策を決める指導者たちの偏愛を受けていた証拠である。またこの一覧表で、『詩刊』が反右派闘争前後、権力者たちと密接な関係を保っていたこと（編集上の原稿依頼システム[18]の関係もあろう）、もしかとすると、変わりやすい政治運動の風向きや権力者側にとって必要な文学の在り方などに関する示唆さえ何等かの形で得たのではないかという推定もできなくもない。五

七、五八年の『詩刊』と権力者側との関係に触れた公開資料は未見だが、私は『詩刊』と毛沢東など共産党最高級幹部たちとの関係が早期『詩刊』の性格研究におけるキーポイントだと思っている。臧克家が『詩刊』編集長として毛沢東主席に呼び寄せられ、引見されたことに関しては、『中国現代作家選集・臧克家』（人民文学出版社、香港三聯書店有限公司１９９４年８月刊行）にある「臧克家年表簡編」（劉増人、馮光廉共著）に、「一九五七年五十二歳、一月十四日、与袁水拍（同じく『詩刊』編集委員）一起被毛沢東主席召見、談詩歌問題。」としか記述されていないが、臧克家本人が一月二十一日に書いた詩『在毛主席那里作客』（『詩刊』五七年二月号掲載）から次のような具体的な情報を得ることが出来た。其の一、『詩刊』創刊号に発表された毛沢東の作品『旧体詩十八首』と臧克家宛の『関於詩的一封信』の原稿は臧克家たちが毛沢東主席によばれて会いに行く前に編集長臧氏の手元に入っていた。しかしその原稿は毛沢東自らの意志による寄稿ではなかった。その手紙の内容から分かったことだが、もともと『詩刊』（九一年一月号『詩刊』掲載の署名謝克強の詩人徐遅談話録「同志仍需努力」によれば、当時副編集長徐遅の提案で毛沢東主席に原稿依頼を出したのである。その原稿依頼文は徐遅が起草した後、編集長臧克家や他の数名の編集委員たちの承認を得た上で呂剣に筆で清書してもらってから出したということである。）の依頼に応えて執筆したものだった。原稿依頼の出された期日は不詳だが、もともと自作の古典定型詩を発表するつもりがなかった毛氏が原稿依頼にある正当な理由[19]に説得されて寄稿したのである。其の二、臧克家は前から崇拝していた共産党最高指導者毛沢東の特別引見を毛氏の手紙が届いた時点から期待していた[20]。彼は詩人としても、『詩刊』編集長としてもマヤコフスキーやゴーリキーのように、国の最高指導者から高く評価されたくひたすら願っていた。其の三、会見場所については、ただ「国の数多くの重大事件検討を行う広い応接室」といって、詳しく言及されていないが、会見要請は電話で伝わった。そして会見中話し合ったのは詩の問題だけではない、当時共産党の新しい知識人政策「百花斉放、百家争鳴」などの「重大な政治主題」も話題にのぼった。『中国文学家辞典』などには「一九五七年毛澤東召見了他、対詩歌問題作了重要指示[21]」と書いてあるが、それが具体的にどんな指示だったのかは、臧克家か当時居合わせた袁水拍による何らかの形の公表を待つしかない。其の四、前掲『臧克家年表簡編』の中に「袁水拍と一緒に会見によばれた」という内容がある。それによれば、一九五七年までに毛沢東との会見に臧

克家は二回も出席したとのことである。最初の一回は一九四五年九月重慶市にある国民党張治中将軍の官邸で開かれた毛沢東主催の国統区文化界有名人座談会[22]であった。推測にすぎないが、二回目の会見で毛沢東に直接招かれたのは編集長の臧氏ひとりだった可能性が強い。十一年前の大勢の文化人が共に出席した座談会と違って、今回は与党の中央主席が一介の雑誌の編集長の自分にわざわざ会って下さるというのである。彼の気持ちが緊張と嬉しさで大変高ぶっていたのは間違いない。二人で行くなら心細くないし、それに編集部を代表することもできるだろうと思って編集委員である袁水拍氏を連れていったのかもしれない。とにかく、二人で一緒に毛沢東に引見されたことは事実である。その後、『詩刊』に毛沢東が二回、中華全国文学芸術界連合会主席、文化部長兼中華全国作家協会主席という中国文芸界最高ポジションにいた郭沫若が八回、茅盾が三回詩歌作品や文芸評論を発表したという事実は、『詩刊』が創刊当時から毛沢東を初めとする共産党の直接的な指導の下に置かれているということの裏づけにならなくても、他の刊行物と違って、共産党の指導者たちとある種の特殊な関係を保っていたことを物語っていると言うことができよう。[23]一方、視点を変えて『詩刊』の成長史を観察するならば、五七年は「双百」方針の貫徹→共産党整風→右傾思想批判→反革命反社会主義右派分子撃退闘争、五八年は「人民公社」「大躍進」運動など政治闘争と政治運動が相次ぐ。そうした運動の展開に一歩も遅れずに編集方針を合わせていく『詩刊』編集部および『詩刊』そのものの政治に敏感で臨時応変上手な姿勢からもほぼ同じ結論が得られるのである。

（三）臧克家の処世と『詩刊』

『文芸報』、『文芸月報』、『文学研究』など『詩刊』周辺の主な文芸雑誌や五七年度共産党機関紙『人民日報』を考察した時に気付いたことがある。それは編集長を務めた臧克家の処世態度、共産党への認識もしくは人柄などは『詩刊』の存在とまったく関係ないわけではないということである。最後にそのことを述べておきたい。

臧克家の人柄や処世態度を十分に把握できる資料が極めて少ないためここで敢えて展開させて細かく論究できないが、前述のように常に党や国の指導者たちの作品を『詩刊』に載せることや、[24]『毛沢東詩詞十八首解説』[25]を数回

に分けて発表し、また単行本を出版したこと、更に、反右派闘争前後作家協会、或いは作家協会党組主催の数十回にわたる座談会[26]での彼の発言などから片鱗を窺えるのである。ここでほんの一例を挙げてみよう。五七年五月二十二日から六月上旬に開かれた作家協会党組主催の四回にわたる「党外作家座談会」での発言である。この座談会は共産党の指導に対する批判的な意見を提起するのが目的であった。そこで、出席者一同が文芸界共産党指導にあった官僚主義、セクト主義、教条主義を厳しく批判した。ところが、臧克家は五月中旬に『文芸報』主催の文芸界座談会での発言を繰り返して「党は私のことを他人扱いしていないと思う」と一点張りである。さらに、七月十七日に書いた『従一篇文章看蕭乾的反動思想立場』[27]の中でも「人間の思想感情が社会主義精神に合致しているかどうかを見るには、対党関係こそ最も良い試金石である」と明言した。

ここで不審が生じてくるが、誠心誠意の姿勢で数多くの疑い深い知識人からやっと信頼を取り戻した「大鳴大放」のリベラルな空気の中でさえ党に批判を加えるどころか、むしろ時勢の流れに逆らって党を擁護した臧克家の言動[28]には謎が多すぎると思われてもおかしくないのである。その謎について、私は次のように考える。

文芸界においては、四二年の王実味批判、五一年の映画『武訓伝』批判、五四年の『紅楼夢』研究における観念主義批判、五五年の胡風批判と反革命粛清……、こうした一連の指名批判運動はいずれも文学芸術思想論争から、共産党を支持するのか、それとも反対するのかという「敵と味方との政治問題」に発展した。そしてこれらの運動はいずれも毛沢東がみずから発動し且つ指揮をとっていたのである。八十年代になってからこれらの事件の当事者はやっと名誉回復されたが、当時の批判対象王実味、胡風そして共産党に批判的意見を出した数多くの党外知識人は自由が奪われたり刑に処せられたりした。彼等の中には命まで奪われた人も少なくないのである。こうした身近に起こっていた一連の衝撃的な事件を、臧克家は目をつむって無視することができなかったはずである。迫ってくる危機から身を守る姿勢を取ろうとしたはずだ。なぜなら、彼には彼なりの大きな負い目があったからである。それは、その一、かれの階級出身は敵と見なされる地主だった。その二、五十年代初期の知識人分類法で言えば、彼は特に思想改造を必要とする「国統区」作家（四九年までの国民党支配区域のことを指す。共産党支配の区域は「解放区」という。）だった。その三、彼はごく普通の無所属の党外知識人ではなく、中国民主連盟という民主党

派のメンバーである[29]（周知の通り、反右派闘争で真っ先に摘発された〝章伯鈞羅隆基反党連盟〟は二人とも中国民主連盟中央副主席を勤めていた知識人だった。）。一方、臧氏は元々共産主義に信仰を抱いている人ではない。もしそうでないなら、建国後わざわざ民主党派に入党した目的と動機は論理的に解釈できない。常識から言えば、人生にこれだけの暗い影を持つ彼は当時の政治状況の下では、いつ政治闘争の槍玉に上げられても不思議はない。恐らく五五年以後とりわけ五七年の彼は身の破滅という危機を相当意識していたのであろう。さもなければ、詩人の彼が民主連盟の所属でありながら積極的に共産党に近付き、その上政治家たちの間を渡り歩くという危険背中合わせの行動を取るはずがない。要するに、左翼的な偏向に行き過ぎがあっても罪を問われない時代だから、臧克家のような暗い影を引きずっている人は、人一倍権力側に気をつかい、人一倍左傾的な姿勢を取らなければならない。結局、彼のこうした処世態度は当然彼の指導下にある『詩刊』の編集方針に大きな影を落としてしまったのである。）

三、結　び

以上五七年『詩刊』の性格を当時の政治的背景や『詩刊』編集部と権力側との関係、編集長臧克家の処世態度など幾つの角度から検討した。反右派闘争後、編集部の人事調整を経た『詩刊』は性格が大きく変わった。前によく掲載された芸術型詩人の作品は急に消え、その代わりに夥しい数の「労農兵詩人」が作品欄や詩論欄に登場してきた。その後、共産党は反右派闘争の行き過ぎを正すために六一年にごく一部の右派分子に名誉回復させたとはいうものの、社会主義リアリズムという文芸創作原則に関しては一歩も譲ろうとしなかった。これが、五七以来の中国文壇で「百花斉放、百家争鳴」という文芸方針が唱えられながら「労農兵方向と労農兵題材」しか許されず、そしてついに文学芸術が行き詰まるという奇怪な現象を生じさせた本当の原因だと私は思う。詩壇においては、五八年の『詩刊』に出現した大量の「農民詩歌」、「労働者詩歌」、「兵士詩歌」乃至「全民詩歌」もそういう大きな政治的背景から生まれたものである。こうした政治情勢と連動する文学は創造性、個性の発展および文学芸術の多様性を必要としない。農労兵のために奉仕するという大原則の下に、労農兵の英雄像を作上げることと毛沢東や共産党

を賛美することしか許されず、知識人は最初から文学の奉仕する対象から除外されていたのである。一方、知識人にとって、文学は思想改造の道具でもある。多くの作家や詩人たちは党の指示に従い、田舎、工場、国の辺境などに行き、そこで長年間労農兵の生活を「体験」させられたのである。『詩刊』編集部も例外ではなかった。反右派闘争が終りを告げた後、編集長の臧克家は肺結核のため「生活体験」をしに行けなかったが、阮章競は包頭鋼鉄工場に、蔵辰は東北松花江、田間は田舎の農民の生活に入り込んだ。[30] 彼等はそれぞれの行く先で政治運動の必要に合わせて労農兵を対象とする詩歌普及活動に励み、そして大量の速成労農兵詩人群を養成し、結果的には膨大な数の「労農兵詩歌」を『詩刊』に持ち込んだのである。こうして『詩刊』は反右派闘争後、いち早く党の政策宣伝メディアに変身し、党から与えられた任務を全うするためにそれらの政治闘争の副産物を載せる役割を果たしたにすぎないのである。

以上は五七年反右派闘争前後の『詩刊』に対する考察結果である。

注

（1）一九六四年十二月一日に出版された『詩刊』十一、十二月合刊号に休刊予告があった。

（2）『詩刊』創刊号P100。

（3）『文芸報』57、8、P2—3。

（4）五月の『人民日報』には党員の傲慢さに対する文芸界党外人士の苦情が沢山載っていた。文芸界「大鳴大放」の時、この差別待遇をうけたので所属部門の党の指導者に不満不平をこぼした非党員作家は大勢居たという。

（5）公劉の『遅開的薔薇』はその後反右派闘争の中で「毒草」作品として指名批判された。57，27号『文芸報』P9、何施良『我們不需要這様的詩人』参照。

（6）具体的には『星星』創刊号に発表された石天河の抒情詩『吻』を指している。

（7）『文学界開始整風』五月十九日『人民日報』第六面記事による。

(8) 『在延安文芸座談会上的講話』が四二年五月に発表されたので、五月に記念の文章が現れるのは不思議ではないが、「百花斉放、百家争鳴」の現実と結び付けた論じ方として『詩刊』に初めて現れた。

(9) 「香花」か「毒草」かを区別する六つの標準とはa、全国各民族の団結に有利である；b、社会主義改造と社会主義建設に有利である；c、人民民主独裁を固めるのに有利である；d、民主集中制を固めるのに有利である；e、共産党の指導を強めるのに有利である；f、社会主義国の団結と平和を愛する人民の国際的団結に有利である。以上の六つの標準のどれかにかなった文学芸術作品や言論は「香花」と見る。しかし、その「有利である」がその反面になると、「毒草」かどうかに対する判別標準となる。

(10) 薄一波著『若干重大決策与事件的回顧』P608によれば、党の整風は穏やかな思想教育運動で、批判の原則は「知無不言、言無不尽；言者無罪、聞者足戒；有則改之、無則加勉」だったという。

(11) 蕭乾（『文芸報』の副編集長）；劉賓雁（『中国青年報』新聞社勤務）；戈揚（総合雑誌『新観察』編集長）；呉祖光（中国一流の劇作家）；王若望（『文芸月報』編集長）；白航（『星星』詩誌編集長）；艾青（『人民文学』副編集長兼『詩刊』編集委員）だった。反右派闘争中、「丁、陳、馮、江、呉反党集団」の一員として断罪された。

(12) 前掲『若干重大決策与事件的回顧』P619。

(13) 『有這样的詩人』（白樺『人民日報』9,6）や金真の文『艾青的逆境』また『臉譜種々続集』（沙鷗『人民日報』）など数多くあるが、艾青に対する人身攻撃が殆どである。作品批判の本格的な論文として完成度の高いのは恐らく『文学研究』（58,1）に掲載された馮至の『論艾青的詩』だと言えよう。この論文の中で艾青の「詩論」と作品との不一致の問題が初めて問われた。

(14) この「落とし穴」説を直接裏付ける根拠は少なくとも次の二つある。一つは五七年一月時点の毛沢東の発言である。毛沢東は「〈百家争鳴〉はいいところがある。あの牛頭蛇身の悪人たちに自ら這い出させる」と党の高級幹部たちに言った。（「在省、市、自治区党委書記会議上的講話」『毛沢東選集』第五巻。人民出版社七七年四月第一版）もう一つは、反右派闘争の前に、『人民日報』が党中央の指示に従って右傾的な言論に反撃しなかった。「その目的は魑魅魍魎、牛鬼蛇神（筆者注：様々な悪人の譬え）に〈大鳴大放〉させ、毒草に伸びれるだけ伸びさせ、人民に世の中

にこんなものもあるのだとびっくりさせたあとこれらの醜いものを全滅させることにある」。「これが陰謀だという人はいるが、我々はそれは陽謀だという。」『毛沢東選集』第五巻P437。

(15) 河北人民出版社八八年二月刊行『簡明中国当代文学辞典』P295による。

(16) 五七年八月七日『人民日報』『文芸界反右派闘争的重大進展――攻破丁玲、陳企霞反党集団』内容による。

(17) 五七年創刊の文芸誌一覧：『星星』詩誌（57,1,1）；『雨花』月刊（57,1）；『奔流』月刊（57,1）；『曲芸』月刊（57,2）；『緑洲』隔月刊（57,3）；『文学研究』（57,3；五九年『文学評論』に改名）；『収穫』隔月刊（57,7）など。そのほか、『文芸報』は半月刊から週刊に変身（57,4,14）。さらにに月刊『草原』（前身：『内蒙古文芸』）、月刊『北方文学』（前身：『黒龍江文芸』）；月刊『隴花』（前身：『甘粛文学』）など五七年に雑誌名を新たにして登場した刊行物も多数あった。

(18) 『詩刊』十一月号編集者後書きによれば、それまで特定の作者に依頼した原稿は六十篇で、最初の数ヶ月は殆ど原稿依頼によるものであった。五八年「大躍進」運動の必要に応じて労働者、農民解放軍戦士からの投稿をなるべく採用する編集方針に急変したという。

(19) 『詩刊』創刊号の編集者後書きによると、世の中で流布されていた毛氏の詩にある誤字を訂正するのが『詩刊』掲載の狙いだという。

(20) 『在毛主席那里作客』に臧克家は、「詩について話し合おうという要請の手紙が突然届くかもしれない，／レーニンがマヤコフスキーの詩を読んだあと，／彼が現代最も偉大な天才だと称したことが私は思い出される，／私にはあんな幸運が訪れないのだろうか？」と歌う。毛氏からの寵愛を期待していたことが十分窺える。

(21) 『中国文学家辞典』（現代第一分冊）P613。四川人民出版社七九年十二月第一版。

(22) 座談会終了後、『毛沢東、你是一顆大星』を書き、九月九日の重慶『新華日報』に何嘉という署名で発表した。

(23) こうした共産党指導者たちへの積極的なアプローチの姿勢は五七年反右派闘争以後も保たれていた。例えば五九年四月、六二年四月十九日、更に六三年の夏などに行われた「詩歌座談会」に周恩来、陳毅、朱徳、郭沫若などが直接関わっていた。その間臧克家は編集長だった。前掲「臧克家年表簡編」参照）

(24) 反右派闘争前に無党派や民主党派所属の高級知識人は共産党の整風会議に招かれ、解放後の共産党指導に対する批判的な意見が求められ、又反右派闘争中、政治的立場や反革命右派分子に対する態度の表明を要求された。

(25) 五七年二月から作品『吻』のことで厳しく批判された『星星』の編集者石天河は反右派闘争中右派分子と判定された。罪状に『詩刊』創刊号掲載の毛沢東の詩を『星星』に転載することに反対したことが挙げられた。この資料で、当時『詩刊』の政治的姿勢の裏をとることができた。（「在〈草木篇〉的背後」姚丹『人民日報』（57,8,16）。

(26) 中国青年出版社五七年十月出版、臧克家解説、周振甫注。

(27) 『文芸報』十七号P7参照。

(28) 五月三日の『人民日報』掲載の臧克家の文「六親不認」には「一部の共産党員が生意気で人々から敬遠されていることは事実である」、また五五年「反革命粛清」運動後、人間関係は同志の信頼感から不信感に変わったといったような不満を書いた。恐らくそれが彼の二重人格の間での動揺だろう。しかし五七年十二月三十一日の『人民日報』第八面掲載の『送詩友下廠下郷』という文に「六親不認」に誤ったことを書いたと正式に謝罪した。

(29) 前掲『臧克家年表簡編』によれば、彼は五一年六月に中国民主同盟に参加したという。

(30) 五七年十二月三十一日『人民日報』第八面臧克家『送詩友下廠下郷』による。